

## VI. 貧困・人口爆発・環境破壊 = アフリカ コラム = 木を植える・・・小島通雅氏（サヘルの会）に聞く

著者	小島 道一, 藤崎 成昭
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	調査研究レポート
シリーズ番号	14
雑誌名	発展途上国の環境問題--豊かさの代償・貧しさの病
ページ	330-338
発行年	1992
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00015744">http://hdl.handle.net/2344/00015744</a>

## コラム 里木を植える◎小島通雅氏（サヘルの会）に聞く

アフリカで植林活動をしている「サヘルの会」の小島通雅さんに、同会の活動について伺いました。

●まず、「サヘルの会」の活動が始まったきっかけについてお聞かせください。

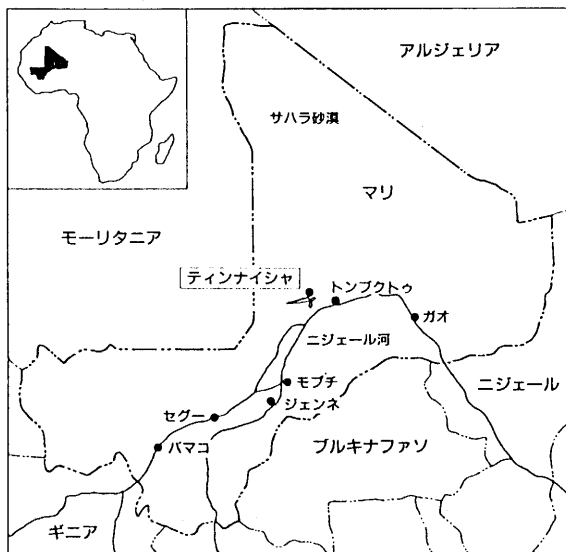


一九八五年前後のアフリカにおける飢餓に対しては、世界的に援助の手がさしのべられました。この時日本の市民団体からも、緊急援助が行われたことをご承知のとおりです。危機的な状況を脱すると、より長期的に住民の生活の安定化をはかるための農業や植林を中心とした援助も始まりました。しかし、緊急援助をきっかけに生まれた団体では、あらたな事態が発生すればそちらに重点が移ってしまうのが普通で、組織や物資の使い方なども、農業や植林活動にはなじみません。緑化や農業は、もっと気長に、安定した状況の時、あるいは、そうした状況を作りながら、続けて行かなければなりません。そ

VI 貧困・人口爆発・環境破壊—アフリカ



ティンナイシャ村の人々



1973年から強まったサヘル地域の干ばつで家畜を手放した遊牧民の一部が生活を始めた、マリ共和国のファギピヌ湖畔、ティンナイシャ地区。ここで農業と植林を行ないます。

ういう立場から私たちの活動がはじまりました。会の設立は、一九八七年一月です。

●植林等の活動を行っている場所はどういうところなのか。

マリ共和国のティンナイシャ村というところです。ここはニジュール川が砂漠に食い込んでい  
る一番北のところで、サハラ砂漠の南縁地帯といえます。砂漠化が進みつつある地域といってい  
いでしょう。自然の変化の激しい地域です。その変化に対応して、人々はさまざまな生活の糧の  
得かたを身につけています。遊牧をして生活をしている人、定住して農業をやっている人、水を  
求めて移動しながら農業をやっている人等、実にさまざまな人々が住んでいます。

次に何故ティンナイシャ村を選んだかということですが、複数の候補地を調査したうえでこの  
村に決めたわけではありません。安定した自然条件で、情報も整っており、かつプロジェクトの  
実行に適した人間が容易にみつけれられるような状況であれば、広く調査したうえで最適地をみつ  
け、事前に計画したとおりにプロジェクトを行うことも可能かもしれません。しかし、サヘル地  
域のように、自然条件が激しく変化している、あるいは、資料も基本的にはない場合には、あら  
かじめプロジェクトの場所ややり方を決定しても、必ずしも思うような結果を得られるわけでは  
ありません。自然も刻々と変化し、また現地の住民も移動したりします。そのような状況の変化  
に対応し、さらには、実際にプロジェクトを行う人間の能力に応じて、試行錯誤を行うことが大  
切になると思います。つまり不確実性の高い状況下にあつては、試行錯誤を繰り返すなから、  
より良いやり方を見つけていくという方法をとるべきだと思います。

ティンナイシャ村の場合も、偶然の重なり合いと、それをどう捉え、どういうふうにかしていくか、そんな試行の繰り返しのなかで当初の活動場所として決めました。

具体的には、まずサヘル会のメンバーの一人がマリに行ったとき、援助に対するぶら下がり方のうまい人に偶然会ってその人の口車に乗せられた形で、ティンナイシャ村を候補地としました。次に2、3人で事前調査に行ってみると、すでにアメリカのNGOが活動をしていたことがあるなど、聞いていた話と現状に食い違いがあり、別のところに行くかという話もできました。しかし、メンバーの中で病気になった人がでて、他を調査する余裕がなくなったこと、外国人と接したところのないところよりも当時のサヘル会の能力・慣れを判断したうえで、「とりあえずここがいいだろう」ということで決めたのです。

●具体的には、どのような活動をなさってきたのですか。

手短かに言えば、井戸を掘り、苗を育て、木を植えています。使った樹種は、二〇種は越えなと思います。雨期になれば水が流入するかもしれないので、水に半年浸かっても大丈夫かどうか、逆に乾期の時には水を与える必要があるかどうか、動物の餌になるか否かなどいろいろなことを考えて、木を選んでいきます。もちろん有用な木でなければ、向こうの人が植林をやってくれるようにはなりません。有用であるかないかというのは、住民の木に対する要望、使い方、将来の成木の所有権などによって違います。生態学的には、多様な種類が一緒に植わっていた方が自然環境の変化に強いといえます。ただ、あまりに価値のある、端的に言えば金になる木が育てば、

力の強い人々が成木を奪ってしまったり、国家が国有林に指定したりすることもあり得るでしょう。植林を行う住民自身の意識や住民相互間の力のバランスを考えながら、樹種を決めていかなければなりません。

土地に関しては、正式な契約を結んでいるわけではなく、信頼関係でやっています。村人と生活を共にすることで私たちが共同体のメンバーとしてある程度の認知を受けているといっているのではないかと思います。土地借用料も払っていません。将来の樹木の所有権が誰のものになるかといったところも今のところ決めていません。将来現地の人々の生活が安定し、村の合意で、木を「守ろう」「切らないでください」という風になればよいのではないかと思います。ただ、もともと、彼らの土地だし、借用料を払うわけでもないのです、彼らが、木を切りたいと言ひ出せば、それは仕方がないと思います。

実際の植林活動には、当然のことながら、現地の人々にも有給で参加してもらっています。われわれの活動だけに依存しないように、午前中だけ働いてもらうようにしています。向こうの要望で、「能力があろうとなかろうと一定の賃金に」ということになっています。ふつう、このようなプロジェクトでは、コミュニティの代表を集めて、コミュニティ単位で人を集めます。「労力を少なくして効果を大」にしようと思えば、そういうやり方になるでしょう。しかし、サヘルの会の人間は二四時間現地の人々と生活を共にしており、村人との個人的なつながりもけっこう早くから築くことができました。そこで、個人単位で始めて、だんだん村に広げてくという方法をとりました。

先に述べたように、サヘル地域の人々は、自然条件等の変化に対応して、さまざまな生活手段に頼りながら生きています。多くの人々が移動を繰り返しながら生活しています。動物をつれ草を求めて移動している人もいますし、農民でも、水を求めて移動していく人がいます。そういう人たちにくっついて歩いていても仕方がないですから、人々が動くということを前提に、地域の中に小さな拠点を何か所か置くようにしてきました。移動する人々についていくのではなく、人々の移動した先に植林活動の拠点を作っておこうという発想です。一カ所を大きくして、人を集めたのでは、周囲の環境への負荷が大きくなってしまいうのも、小さな拠点をいくつか作ってきた理由です。

現在五カ所で植林をしています。最初のところは、スタッフが中心となって作り上げた見本林的なものです。二カ所目からは、お金を払って、定期的に植林をしてもらったり、苗を作っておばさん達に配り、彼女達自身の畑に植えてもらったりしています。三カ所目ぐらいを始めた段階で非常に活動がやりやすくなりました。木が育つのを目の当たりにし、植林が人々の生活にどのような変化をもたらすかを、地元民に言葉で説得する必要がなくなったからです。また、それぞれの拠点に近い住民同士が、相互に刺激しあうようになったからです。

●活動を通じてめざしているものは、何ですか。

サヘルの会に「砂漠化を何とかしなければ」と思って参加してくださる方も多いのですが、最終的な植林の目的は、森林被覆率を維持することでも、回復することであってもならないと思

ます。そこに住んでいる人々の生活を向上させることこそ目標なのです。植林の結果、彼らの生活の糧が一つ増えることが重要なのです。しかし、現地の人々が大規模な林業で生活できるようになるといったことを目指しているわけではありません。

現地の人々は、その自然環境の変動に対応できるように、遊牧、農業を初めさまざまな生活手段に頼っています。いろいろな生活の糧を得る手段の一つとして、木も存在していれば良いのです。森林の回復で、農業の生産に良い影響が出るかもしれませんが、何もできなくなったときに、木を切つて急場をしのげるかもしれません。住民の生活手段を増やし、彼らの生活の安定に貢献することこそが目的です。ですから、植林の効果を測る場合も、面積等の測り易い指標で測つてはならないと思います。住民の生活が少しでも向上したかどうか、判断基準となるべきでしょう。

ODA等の豊富な資金を用いて大規模植林を行えば、たとえば「日本がやった」という事実は、残るかもしれません。しかし、そのような植林が周辺の住民たちに自分達でやってみようという気を起こさせるかどうか私には疑問です。私達の経験から言うと、自分の身近で二〇―三〇本も木が育つてくると、彼らも自分で木を植えてみようとする気を起こすようです。また、大規模な植林で土地を囲いこんでしまうことも問題です。季節的に、あるいは、何年かに一度、動物をつけてきていた人々が、その土地を利用できなくなってしまう、かえって、住民にとって害となることすらあります。

サヘルの会そのものは、向こうの国の人々のためにあります。それに加えて、活動を続けるな



から、日本での自分達の生き方、生活の仕方を振り返り、見直すという気持ちも生まれてきました。ODAによる援助は、どちらかといえば、今の経済生活や経済システムを前提とし、その延長線上で行われているのではないのでしょうか。一方、NGOの活動は、参加した各個人が「豊かな」日本の生活を見直すことにもつながる点で、意味があるものだと思います。サヘルの会では、牛乳パックのリサイクルなどの活動も始めています。

●これからは、どういうように活動を行っていくかとしているのですか。

最初は、植林をとっかかりにしましたが、穀類の確保そのほかが苦しくなってきましたので、主食生産を含めて農業を扱い始めようかと思っています。この数年間で、遊牧民と農民の関係とか、食料調達等における男女の役割の相違、同じ一つの家に住んでも夫の財産と妻の財産は明確に区別されていることなど村の経済の基本的な枠組みが、わかってきました。農業等の、さらに踏み込んだ活動を行っても、予期せぬ結果を生まないようにやれるめどがあったということです。

また、これまで、個人と個人の関係をベースにやってきましたが、今後、現地の側で自主的な受け皿たりうる組織ができるようになれば、そういうところも相手にしていくかもしれません。繰り返しになりますが、砂漠化防止・植林の効果というのは、植えられた木の本数や面積で測られるのではなく、現地の人々の生活がそれによって向上したかどうかで語られるべきであろうと思います。そういった姿勢でこそ、日本人が現地へ行って植林をする意味が出てくると思つて

います。日本の辺りで浪費している分の酸素の代わりに植林すればよいか、さらには、日本の炭酸ガスの排出権を何とかするために、植林すればよいかという話は、許されるころではないと思います。現地の人々の生活が少しでも良くなれば、それが結果として真に砂漠化の防止につながるので。

われわれが活動を続けなければ現地の人々の生活が維持できないような状態にならないようにどこまで植林等の活動を続けるのかもサヘルの会の今後の課題です。

\* \* \*

サヘル人会

設立 一九八七年一月

会員 八八二名(九一年五月現在)

財政(九〇年度) 総収入 三三二、五八一、八七〇円

会費：八% 寄付金：四五% 助成金：四% 事業収入：四%

その他：三%

総支出 三三三、二三四、七三七円

開発事業費 二五、二三七、四〇〇円

事務管理費 七、九九七、三三七円

(小島 道一・藤崎 成昭)